

論文

新村苑子『律子の舟 新潟水俣病短編小説集 I』について

About Shinmura Sonoko's *Ritsuko's Boat*
(Short Stories vol.1 about Niigata Minamata Disease)

後藤 岩奈¹
GOTO Iwana

1、はじめに

まずはじめに、本論に入る前に、私的な内容となるが、中国語教育と中国近現代文学を専門とする筆者が、なぜ水俣病の問題に関わろうと思ったのか、について述べてみることにする。

筆者は、5歳から14歳まで、幼稚園から中学2年までの9年間を九州の熊本で過ごした。菊池郡西合志町（現在の合志市）で、南部の水俣とは直接の関わりはなかったが、当時、地元のテレビ局が製作した水俣病に関するドキュメンタリー番組や裁判のニュースなどをテレビでよく目にしていた。そのため水俣病の問題は、自分の故郷の問題だというような思いがある。また当地は、ハンセン病の療養所「恵楓園」にも近く、小中学校では同和教育も行なわれていた。

北九州での大学時代は中国語を専攻した。そして文学作品を通して、中国の歴史、社会、人々の生活などを見てゆきたいと考えた。中国は歴史的、社会的、政治的に厳しい状況が続く国であるが、その社会的、政治的抑圧からの解放が文学作品のテーマになることも多い。もちろん、決してそれだけが中国近現代文学のテーマではないのだが。さらに、学生自治会活動などを通じて、少し古い言い方をするならば、「被抑圧民衆の解放を求める運動に連帯する」とでも言うか、社会的に弱い立場にある人たちが一生懸命に生きる、その生き方、生きる姿を知って、それに触れて、そこからいろいろなことを学んでいけたら、というような考えを持つようになった。1997年に新潟に赴任して、かつて教科書で学んだ新潟水俣病の問題が、身近に存在することを意識した。このようなことから筆者は、文学を通じて中国社会とその問題を考えることと、水俣病の問題を考えることは、その根底においてつながるもの、共有するものがあると思っている。

筆者が新村苑子氏の小説に触れた直接のきっかけは、2015年12月、新潟水俣病第3次訴訟の支援活動をされている方から、新村氏の小説の書評を書いて地元紙「新潟日報」の書評欄「新潟の一冊」で紹介することを依頼されて、新村氏の『葦辺の母子』を読んだことであった。

新潟市在住の作家新村苑子氏は2冊の「新潟水俣病短編小説集」を出版している。2012年の『律子の舟』、2015年の『葦辺の母子』である。いずれの小説集も新潟県柏崎市の出版社である玄文社から出版されている。いずれの小説集にも、新潟水俣病の被害を受けた人たち、およびその周囲の人たちの内面が細かく描写されている。本稿ではこのうち、『律子の舟』に絞って、その作品の紹介と、作品に見られる特徴や傾向、さらに新村氏の創作方法について、述べてみることにする。

2、作者、作品について

新村苑子氏は1937年、京都の出身で、1945年に神奈川から新潟に移る。1998年から「文芸驢馬」の同人、2010年からは「北方文学」の同人となる。著書に『瓢箪』（驢馬出版、2006年）がある。新潟水俣病をテーマとした作品は2010年から書き始めている。²

『律子の舟 新潟水俣病短編小説集Ⅰ』には、「白い水」、「律子の舟」、「決意」、「川風」、「邂逅」、「兄の声」の6編の短編小説が収められている。このうち、「白い水」、「律子の舟」、「兄の声」を中心に見てゆくことにする。

2-1 「白い水」について

昭和46年（1971年）9月29日、テレビのニュースは新潟水俣病判決の、原告側の勝利を伝えていた。静枝は、判決の結果を知ってから、ずっと頭を悩ませていた。娘の佑子が東京の大学を出て、その後就職していたが、そこで知り合った愛知県出身の男性と結婚することになっていた。静枝は舅の新一、姑のミヨシが水俣病の患者であることから、この男性の両親が水俣病のことを気にはしないか、佑子の結婚に影響しないかと心配していた。以下は静枝と、夫の茂の会話の場面である。

[引用1]

「考えすぎだ。公害問題に関心を持ってたとすれば、もっと前から知ってた筈だ。それでも息子の結婚に反対しなかったんだ。聞かれたら答えればいいんだ」

「聞かれなかったら黙ってるの？ 落ち着かないねえ。いつ話し出されるかと冷や冷やして待ってるなんて。それでも、聞かれて正直に答えて破談にでもなったら、あの子が可哀想だわ」

「どうなるかもわからんことに、今から気ばっか遣^こてるな」

「でもね、知ってたり関心があったりすることと、その問題を引っ被る事は別なもの。誰だって差し障りのある家との縁組は避けるよ。隣の律ちゃんの二の舞はごめんだからね。だから地元^ちに置かなかつたんだから」³

隣りの家は、祖父が劇症型の水俣病患者と認定され、同時に祖母と両親も患者として認定されたが、それがもとで、既に縁談が決まっていた孫娘の律子は、一方的に縁談を破棄された。

静枝が娘の佑子を東京の大学に行かせたのは、「この土地と離れさせて、水俣病にやられた家の者というレッテルが付けられない所で、幸せになって欲しいと考えたから」であった。

佑子の結婚相手の男性とその両親が、新潟の佑子の家を訪問したいと言ってくる。静枝は家族に水俣病患者がいることを知られるのを恐れて、新一とミヨシに、その晩だけ親戚の家に泊まって欲しいと頼む。新一は手足の震えやしびれ、視力の衰え、足がもつれてスムーズに歩けなくなっていて、夜中に転んだりして、お客に知られてしまう、と考えたためであった。以下は、静枝がミヨシに頼みごとをする場面である。

[引用2]

静枝の意図を素早く汲み取ったミヨシは、その言葉に覆い被せるように言った。

「おらたちが居って差し障りがあるってけ」

余りにも的を得た姑の言葉に、静枝は返事が出来なかった。少しの沈黙のあと言った。

「申し訳ないことだと十重承知してるわね。それでも、隣の律ちゃんみたいになっても困る

し……こんな事を頼むのは間違ってるってわかってるけど、あれこれ考えてると夜も寝られないんだよね。今までもおじいちゃんたちには辛い思いをさせてきたし、済まなく思ってるわね。無理な頼みはこれで最後にするから、どうか佑子に免じてお願いします」

(中略)

「ほんね、おめてや手前の子ばっか可愛いんだがの。沢山歩かんねじいちゃんをどうやって連れてくんで。おらだって本所までなんて歩かんねがは、おめが一番よう知ってるねっけ。それだてにあっちへ行けこっちへ行けだがの」

その通りだ。返す言葉はなかった。

「……おら、いま気が付いたで。余所ん人でのうて、おめがおらたちを一番差別してんだがの。じいちゃんを人前に出しようねえっけ。隠してんだの」⁴

じつは、静枝が両親に病気を隠すようお願いをするのは、これが二度目であった。かつて、昭和34年(1959年)、阿賀野川の水が白く濁って、たくさんの魚が浮き、それを採って食べた人たちはその後、手が痺れ、疲れやすくなり、畑仕事もできなくなる。1965年、新潟水俣病が公式確認されると、沼垂診療所の医師が往診に来るようになる。診断を受ける人もいたが、静枝は、娘の佑子の将来を考えて、水俣病の家族と噂されるのを恐れて診察を断り、その後も、新一とミヨシに診察に行かないように頼んでいたのだった。

娘の佑子と相手の男性、その両親は、当日、家を訪れたが、彼らは挨拶だけすると、家には泊まらず、四人ともその日のうちにタクシーに乗って帰って行ってしまった。静枝は置き去りにされたような淋しさを味わい、打ちのめされてしまう。そして静枝は、自分が両親にしてきたことがどうしたことだったのか、考える。静枝は、新一とミヨシに、今まで医者に行かないでと頼み続けていたけれど、診療所の先生に診て貰おう、認定の申請を出そう、と言う。ミヨシは静枝の変わりように少々呆れつつも、12年前に川が白く濁り、それから体が思うようにならなくなった事を思い返し、感慨深く思うのだった。

2-2 「律子の舟」について

昭和39年(1964年)、新潟は「新潟国体」の建設ラッシュ、その直後の新潟地震で、その復旧工事のため、にわか土建屋が繁盛していた。米川孝造は、阿賀野川で漁をしていた父の春夫が二年前から手足が痺れだして仕事ができなくなり、替わりに舟を出していたが、今では漁を止めて、陸の土建屋で働いていた。

ある日、同じ会社で働いている、元網元の親方である平松に呼び止められる。平松は、孝造夫婦と孝造の親夫婦が、水俣病の申請を出したことを知っていた。

[引用3]

「お前ん所^{とこ}は二夫婦して水俣病の申請を出したっての？」

えっ、なして知ってんだ？早耳だな。孝造が驚きを隠して内心で呟いていると、彼は続けて言った。

「お前ん所の母ちゃんがあっちこっちで喋ってるて話だで」

またか。あの馬鹿が！内心で舌打ちしても顔には出さず、逆に聞き返した。

「お前さん方は出さねんかね」

「ここらん人^{しよ}は何人も出したげだが、おらってにはそんな人は一人もいねすけの」

ふーん。お前さんもその口だね。孝造は腹の中で苦々しく呟いた。

松浜地区では水俣病になっている者はいないと、口裏を合せているらしいとの噂は耳にしていたが、当地の者から直接聞いたのは初めてであった。⁵

平松は、自分の26歳になる息子の雄一が、孝造の25歳になる娘律子とお付き合いをしていることに触れて、律子の家族が水俣病の申請を出したことを理由に、二人のお付き合いを止めさせるようにと、孝造に伝える。平松から言われた孝造は、自分自身、迷って、苛立ちながらも、娘の律子に、平松の息子雄一と付き合うのを止めるよう言う。この日、雄一と映画を見に行く約束をしていた律子は、事態が呑み込めないでいる。以下は、律子が数日後に一人で思い悩む、その思いが述べられている箇所である。

[引用4]

雄一の家族にはもろに嫌われてしまった。彼も同じ気持ちなのだろうか。一切、音沙汰がないということも律子を悄気させた。親が反対しても、彼自身その気がなければ、何か言ってくるはずだ。親に厳しく言い渡されたとしても、男なんだもの自分の意志を通して欲しい。それとも私が彼を買いかぶっていたのか。いや、逆に、私はその程度の相手でしかなかったということか。私は自惚れていたのか。きっぱりとけじめを付けねば、と思う後からまたも、もしかしたらあの晩、親に隠れて家の前まで来ていたろうか、との思いが閃いて、家に来て堂々と挨拶するわけにはいかないから、私が外に出てくるか、窓からでも顔を出すかもしれないと、道端の木の陰から窺っていたとしたら？そんな思い付きは何の根拠もないと分かっているながら、でも、突然だったし、雄一さんだってどうしていいか分からなかったなら、それくらいはしてたかもしれない。なぜ、あの時そこに気が回らなかったのかと悔やんだ。もしかして、次の日も来てたとしたら……今頃気付いても遅い。律子は萎えた心で呟いた。⁶

そして、かつてのデートで、雄一のバイクの後ろに乗せてもらい、阿賀野川の堤防を走りながら、雄一が対岸に止めてある小舟を指して、爺さんからもらった舟に、律子丸と名前を付けると言ったことを思い出す。

[引用5]

しばらく無言で走った後、言った。

「律子丸だな」

「えっ、何て言ったん？」

背後で律子は、彼の肩へ頭を寄せて聞き返した。しかし、雄一は笑って二度は言わなかった。

律子丸だって！彼女はしっかりと耳に届いていたその言葉を心の中で反芻していた。聞こえなくて聞き返したのではなかった。反射的に言葉が出てしまったのだ。脈拍が早くなっていた。⁷

律子が通っていた洋裁学校でも、なぜか友人たちが、律子が失恋したことをすでに知っており、律子は大きなショックを受ける。そのため夜も眠れない日々が続く。

ある日の夜、父から「律、学校の帰りに薬を貰うて来てくれや」と頼まれる。これは睡眠薬である。「父の言葉を耳にした瞬間、何が律子の中で弾け」る。そして、かつて雄一のバイクの後ろに乗って見た舟のことが思い出される。

[引用6]

いつかあの舟を見に行きたかった。勇気がなくてあそこまで行けなかったし、見たってもう雄一さんは律子丸と言った事も忘れてるだろう。分かっているが、あの時、川風に揺られて耳元に届いた「律子丸だな」の彼の声が、律子の中で聞こえてくるのだ。⁸

このあと、律子は自ら命を断つことになる。

2-3 「兄の声」

「兄の声」は胎児性水俣病のお話である。

ある日、公夫は夢の中で、「お兄ちゃん」という声を聞いて、目が醒める。しかし、公夫は、それが自分の声なのか、死んだ兄俊行の声なのか、分からなくなってしまう。9歳で亡くなった兄の俊行は、声を発したことがなかったので、兄の声は聞いたことはなかったはずなのだが。公夫は現在、反抗期に入った高2、中2の二人の子供の父親であるが、公夫は、自分がまだ子供だったころの事を思い出す。

公夫の家は阿賀野川沿いで、家庭は、電話も石油ストーブもない貧しい家庭で、9歳の兄俊行は、生まれてから一度も言葉を発さずに、寝たきりの病気で、長い風邪ひきのあと、ある冬の寒い日、医者からも十分な対応もしてもらえずに、肺炎で亡くなる。家族は皆ずっと、俊行は脳性マヒだと思っていた。

俊行が亡くなったあとのある日、川口さんという男性が訪ねて来るようになり、亡くなった俊行について、検査（臍の緒の検査）を受けるよう勧める。しかし祖母は、絶対にそれを受け入れない。その会話の一部始終を傍から聞いていた公夫は、何を言っているのか分からず、何があったのか知りたくて、川口さんが訪ねて来るたびに、その話を盗み聞きするようになる。以下は、祖母と母篤子の会話を、公夫が盗み聞きしている場面である。

[引用7]

「なに言わった？俊のこどだろうが？」

「聞かったろも、おらにはわがらんし」

「生まれてくる前から、腹ん中で水俣病になってたんでねえかと、言わんばっかのことだろうが」
「おらの腹ん中に溜まった毒を、あん子の体が引っ被ってくったすけ、おらも公夫も秀平も水俣病の気は出てねんだとね」

「それでお前は何て言うたんで」

「なんにも言わね。初めて聞いたんだし、^{ほんき}本当だろうかと思^{たまげ}うて驚いてしもた。医者どんは脳がやらってる小児マヒだと言うたてがんに。どことかにそういう子が^{いっぺ}沢山いるんだと。小児マヒとよう似てるげなんだわ」

「どっかてやどこだ？」

「わがらね。熊本の何とか聞いたことねえ所^{とこ}だった」

「公夫や秀平が居んだすけ、めったやたらな話が広まれば、取り返しが付がねなんだ。俊だけ^{けえ}でねえんだすけな、お前の子は」⁹

そしてとうとう、母の篤子と祖父は、俊行の臍の緒の検査をして貰う、という決意をする。

[引用 8]

「調べてもろえ。きちんと証明してもろた方がいいわや。俊のためでもあつし、母ちゃんの気持ちになってみれば、そう願うがんは普通だわや」

それまで黙って聞いていた祖父が、まだ続けそうだった祖母の言葉を遮って言った。いつもとは違ってしまった大人たちの力関係に、公夫は度胆を抜かれながらも、ここにはいない母も含めて、大人は大事な時にはきちんと自分の気持ちは言うんだと思った。初めて大人の本当の姿を目撃した感じだった。聞いている自分も、大人の仲間入りをしているような、少し背が伸びたような、高揚した気持ちを味わっていた。(中略)

「人の毒を引っ被ってくれるなんてがんは、人間の業ではねえわや。神か仏でもねえ限りならん事だ。あれはそんげな役目を貰うて来たんかなあ。たあんだ、にこにこと笑うてるだけだったが」¹⁰

子どもの頃の記憶から戻った公夫は、最近めっきり口をきかなくなった二人の子供に、そろそろ水俣病の話をしようか、と考える。

3、作品に見られる特徴、傾向について

新村氏の作品には、いくつかの特徴が見られる。

一つは、結果として差別的なことをしてしまう心理である。「白い水」では、静枝は、娘の佑子の将来の幸せを願うあまり、新一とミヨシのことを考えられないで、結果として差別的なことをしてしまう。その心理が描かれている。[引用 2]

二つ目は、女性の細やかな心理である。「律子の舟」では、雄一とのお付き合いを止めさせられた律子という女性の、細やかな心理が描かれている。[引用 4、5、6]

三つ目は、子供の成長である。「兄の声」では、大人たちの話を盗み聞きして、自分も大人になったように感じる、子供の成長が描かれる。[引用 8]

こういった特徴、傾向は、新村氏の他の作品にも見られるものである。

「律子の舟」では、主人公の律子は自ら命を絶ってしまう。そのため、結末だけを言うと、「悲劇」であり、「悲しい」話である。しかし筆者(後藤)は作品を読んでいて、あまり「悲惨」には感じなかった。あまり暗い気持ちにはならなかった。そこで、それはどうしてなのかを考えてみた。

それは、律子の死によって、家族や周囲の人々は、「目覚める」と言うと、少々格好のよい表現になるが、周りの人たちは、彼女の死によって、何かに「気づく」、「気づかされる」ことになるのである。例えば、自分に欠けていたものなどを。それが次の世代、のちの人々の生き方や行動に影響を与えてゆくというか、つながってゆくのである。

「律子の舟」に続く「決意」では、律子の弟である明が大人になって、患者さんの掘り起しをして、訴訟に参加する。

父親によって律子と別れさせられた、律子の元のボーイフレンドの雄一を主人公とした「邂逅」では、雄一と律子とのかつての関係を気にする、雄一の妻である奈美子とのやりとり、そして50年後の、現在の雄一の姿が描かれる。

このような内容から、作品集の作品を通して、「死」と「生」がつながっている、「死」と「生」が一体となっているような作者の世界観が見られる。亡くなった人が、あたかも「殉教者」のように、周りの人々を変えてゆく。作品集の目次の裏には、次のような「ヨエル記」が記されている。

[引用9]

この地に住む者は耳を傾けよ
このようなことがあなたがたの
先祖の時代にあったろうか
これをあなたがたの子どもたちに伝え
子どもたちは子どもたちに
その子どもたちは後の世代に伝えよ¹¹

4、作者の創作方法について

新村氏の創作方法、フィクションということについて、述べてみる。

熊本水俣病を描いた文学作品として世に広く知られる石牟礼道子氏の『苦海浄土』は、一読すると、ドキュメント、ノンフィクションのように見えるが、実際のところは、石牟礼氏自身の言葉や、彼女を熟知する文芸評論家渡辺京二氏の手記によると、以下のようなことなのである。

[引用10]

白状すればこの作品は、だれよりも自分自身に語り聞かせる、浄瑠璃のごときもの、である。¹²

[引用11]

実をいえば『苦海浄土』は聞き書きなどではないし、ルポルタージュですらない。ジャンルのことをいっているのではない。作品成立の本質的な内因をいっているのであって、それでは何かといえば、石牟礼道子の私小説である。¹³

新村氏の小説は、一読して、登場人物の心理や思いがとても細かく書かれていて、作者の創作、フィクション、このような言い方は何であるが、「作り話」ということがすぐに分かる。以下の引用は、「あとがき」にある、新村氏の小説執筆の動機である。

[引用12]

新潟水俣病という病気が、阿賀野川流域、殊に河口に近い地域に多発したことは知っていましたが、恥ずかしいことですが深く考えることもなく、どちらかと言えば距離を取って眺めていたし、いつの間にか忘れていたというのが正直なところでした。

ある時、石牟礼道子さんの『苦海浄土』を読んで強烈な衝撃を受け、そう言えば新潟にも……と、ようやく身近に引き寄せて考えられるようになりました。

図書館から借りた関連の本を読みながら、私なりにこの病気に冒された人たちの苦しみや、周囲の人たちがどのような反応を見せたのか、そのあたりを書いてみよう、ノートを取り始めました。図らずもそれと符丁を併せるように、市主催の「新潟水俣病市民講座」が開かれ、参加しました。平成二十年七月でした。第一回で旧昭和電工鹿瀬工場裏の高台にある排水口を見学したのですが、(中略)

その後で患者さんたちとの交流があったのですが、私にとって願ってもない企画でした。訥々と語る患者さん達の言葉から沢山のことを教えられました。(中略)

そんな諸々の思いを込めて、私が作った人たちに悩んで貰い、苦しんで貰い、病気を受け入れ

て貰い、家族の一員としてどう病気と向き合えばいいのか、私なりに考えてみました。¹⁴

5、まとめ

筆者は、2012年5月に、新潟地方裁判所において、新潟水俣病第3次訴訟の、50代の女性の陳述を傍聴したことがある。この女性は小学生の時、水俣病の検査に参加したところ、その様子が報道されて、その翌日から学校でとてもつらい目に遭うようになったという。この女性は陳述で声を上げて泣いていた。患者さんが水俣病であることを他人に知られることの恐怖は、水俣病でない者の想像をはるかに超えるものがあるのだということを知った。

新村氏は、まるで巫女さんのように、様々な人物が乗り移って、それぞれの立場の思い、気持ちになりきって文章を紡いでいる。日々のめまい、手足の痺れなどの症状の苦しみ、「金目当て」と中傷される悔しさ、病気のことを人に知られること、また個人が特定されてしまうことへの恐怖、同じ家族や親戚にも病気を相談できない複雑な人間関係やエゴなど、水俣病を抱える人たちとその周囲の人たちの、人に言えない胸の内が細やかに描かれている。

水俣病の問題を理解しようとするのであれば、その当事者である患者、被害者の方々の証言や記録に触れることがまず第一であり、不可欠であると思われる。しかし、当事者であるが故に、どうしても人に語れない事、口外できない、公表できないこと、また「言っても、人には分かってもらえないのではないか」と思うことも多くあると思われる。新村氏は、それを創作（想像）、フィクションという方法で表現し、伝えようとしている。それは創作、フィクションであるからこそできる、という面もあるのではないかと思われる。¹⁵

水俣病問題を知るには、患者や被害者の方々の語りや証言に触れ、さらに、公表できない多くの被害者の人たちの胸の内に、思いを馳せることも大切だと思われる。

また新村氏の作品は、全編を通してセリフは新潟弁で書かれている。新潟県外の読者にとっては、かなり分かりにくいものがあると思われる。ただ、声に出して、ゆっくりと音読してゆくと、慣れてきて、新潟弁のリズムやパターンが分かってきて、あたかも新潟の老人たちから耳元で語りかけられているような錯覚を覚える。

注記

本稿は、2018年1月6～7日、熊本県水俣市の水俣市公民館において開催された、熊本学園大学水俣学研究センター主催の「第13回水俣病事件研究交流会」における筆者の報告に、加筆修正したものである。

さらに2018年7月7日、新潟市総合福祉会館において開催された、新潟水俣病阿賀野患者会主催の「新村苑子著『新潟水俣病短編小説集』を読み解くゼミナール」での討論も参考にした。

附録：「新潟弁→標準語」対照表

[引用2]

「ほんね」→「ほんとうに」。「～ってけ」→「～なのか」。「～わね」→「～わよ」「～だよ」。

「おめ」→「おまえ」。「～だかの」→「～だから（なあ）」。

「～ねっけ」→「～（では）ないか」「～だろう」。「それだてに」→「それなのに」。

[引用 3]

「なして」→「なぜ」。「～だて」→「～だそうだ」。「人(しよ)」→「人(ひと)」。

「～げ」→「～のような」「～のようだ」。「～(だ)すけ」→「～だから」。

[引用 7]

「なに言わった？」→「なにを言われた？」。「わがらんし」→「分からないし」。「言わんばっかの」

→「言わんばかりの」。「～すけ」→「～(した)から」。「脳がやらってる」→「脳がやられている」。

「～がん」→「～という事」。

[引用 8]

「～なんだ」→「～なるんだ」。「～だわや」→「～だよ」「～だぞ」。「そんげな」→「そのような」。

「たあんだ」→「ただ」「ただただ」。

参考文献

石牟礼道子 1972. 『苦海浄土—わが水俣病』講談社文庫。

新村苑子 2015. 『葦辺の母子 新潟水俣病短編小説集Ⅱ』玄文社。

柴田毅実 2012. 「新潟弁で書かれた『苦海浄土』、新潟の一冊」『新潟日報』11月4日。

平成24年度新潟県立大学公開講座『阿賀野川流域から世界へ』記録集 新潟県立大学地域連携センター。

飯嶋秀治 2015. 「病の民俗誌 —石牟礼道子『苦海浄土』批評から—」第10回水俣病事件研究交流集会レジュメ。

注

1 新潟県立大学国際地域学部 (iwana@unii.ac.jp)

2 新村苑子『律子の舟 新潟水俣病短編小説集Ⅰ』(玄文社、2012)、奥付の著者紹介より。

3 同上、11頁。

4 同上、19～21頁。

5 同上、47～48頁。

6 同上、66～67頁。

7 同上、69～70頁。

8 同上、83頁。

9 同上、203～204頁。

10 同上、215～216頁。

11 同上、目次の裏

12 同上、石牟礼道子「改稿に当って」『苦海浄土—わが水俣病』(講談社文庫版、1972)、304頁。

13 同上、渡辺京二「石牟礼道子の世界」『苦海浄土—わが水俣病』(講談社文庫版、1972)、309頁。

14 同上、226～228頁。

なお2017年12月、筆者は電子メールにて、新村苑子氏に、作品の登場人物について、「だれかモデルとなる人、参考にした人がいるのでしょうか」と質問したところ、新村氏よりご回答をいただき、「患者さんたちの体験記を読んで参考らせて貰いましたが、特定のモデルはいません」とのことであった。

15 2018年1月7日、熊本県水俣市の水俣市公民館において開催された、熊本学園大学水俣学研究センター主催の「第13回水俣病事件研究交流集会」において、筆者は本稿の元となる報告「新村苑子氏の新潟水俣病短編小説集について」をおこなったが、報告の後、会場の参加者より、「登場人物の経験や苦しみ、そっくり自分達のそれと重なって涙が止まらなかった」という主旨の発言があった。